

〈無量寿経〉誓願文と釈迦の菩薩行

——説一切有部説の痕跡——

中 御 門 敬 教

●はじめに 〈無量寿経〉菩薩論を代表する法蔵説話は授記思想を背景とし、初期仏教や部派仏教と深い繋がりが確認できる (cf. 藤田 [1970] p.336ff.). しかしこの法蔵説話とは別に、有部系菩薩論による經典整備の痕跡が〈無量寿経〉には確認できる。この点を明確にして、〈無量寿経〉における重層的な菩薩論を明かしたい。その際に、部派文献に説かれる釈迦菩薩行を手がかりにする。部派文献、特に有部系における釈迦菩薩論の一系統に、〈発智論〉→〈大毘婆沙論〉→〈雜阿毘曇心論〉→〈俱舍論〉がある。このうち最も詳細であり、かつ起点となるものは〈大毘婆沙論〉 (cf. 玄奘訳巻 176ff. 以下〈婆沙論〉) である。しかしそれは大部なため、今回の考察ではその説を良く踏襲綱要した〈俱舍論〉を用いる。

●部派の菩薩論¹⁾ 〈俱舍論〉「業品」(vs.108-111) 菩薩論は〈婆沙論〉 (cf. 五百大阿羅漢等造, 玄奘訳『阿毘達磨大毘婆沙論』(T27, p.886c9ff.)) や〈雜阿毘曇心論〉 (cf. 尊者法救造, 僧伽跋摩等訳『雜阿毘曇心論』(T28, p.961b26ff.)) を忠実に承け、釈迦菩薩の成仏の因果を説明する点が特徴である。その冒頭にはいつから菩薩であるかという問いに対し、三十二相の異熟となる業を作ろうとした時からと説かれ、それ以降は常に「善趣の者、良家の生まれ、具根者、男性、[前]世を思い起こす者、退転しない者 (v.108cd.)」とされる。他者に対しては「金銭では買われない奴僕」となり、優れた円満を得ても「無縁の慈」によって従属し、抑制や、辛苦の忍耐に秀でた者となる。続く v.109 では三十二相を成就する条件として、瞻部洲への生、男性たること、現前に仏に向かうこと等が説かれる。次いでジャータカを踏まえた釈迦菩薩の成仏論が展開される。釈迦は三阿僧祇九十一劫をかけて成仏したとされる。その内訳は三十二相獲得に九十一劫、諸仏供養に三阿僧祇劫である。通常三十二相を得るには百劫かかるが、釈迦は勇猛精進や「エーカ・ガーター」の読誦によって精進波羅蜜が完成し、九劫減になったという。また三阿僧祇劫中の初無数劫で七万五千仏 (終時は宝髻)、第二無数劫で七万六千仏 (終時は燃灯)、第三無数劫で七万七千仏 (終時は毘婆尸) を供養したという。これはこの釈迦に限っ

たことでなく、先行する釈迦にも共通すると説かれる。以下の通りである。

「梵本試訳：彼ら全て〔の諸仏〕の【以前に釈迦牟尼が居る (v.110d.)】。釈迦牟尼と名付けられる正等覚者が以前に居た。その場所で菩薩となった〔現在の〕世尊によってこの誓願が作られた。『私もこのような仏になりたい』と。我々の聖者のように、〔以前の釈迦牟尼〕も同様に〔三阿僧祇中の〕末劫において生じ、彼の教えも同様に千年のきわまでとどまった。」(cf. Pradhan [1975] p.266ff.)

このように過去と現在にわたる同一名称の仏の相続が説かれる。ちなみに大乘経典〈阿闍経〉も有部説と基調を等しくし、阿闍菩薩が阿闍仏になると説く。

「蔵訳試訳：シャーリプトラよ、またかの世尊・如来・応供・正等覚者たる阿闍は（中略）どの〔生〕でも梵行を行い、どの〔生〕でもすなわち阿闍といわれる名前の、まさにその者となって、彼は仏国土から仏国土に赴き、仏・世尊が現前に居られる場所に生まれた。」(cf. 佐藤直実氏私家版校訂テキスト p.37 (1.132-1.133))

こうした名称の相続を重視する阿闍の性格は、例えば〈悲華経〉(T3, p.195c3ff.)や〈維摩経〉(cf. 「見阿闍仏品」)にも確認できる²⁾。一方、成立や性格に共通点が多い〈無量寿経〉では法蔵菩薩から阿弥陀仏へと名称が変化する。なお「世間品」(cf. Pradhan [1975] p.182ff.)にも菩薩論が詳説される。本稿との関係では冒頭の「菩薩は誓願を建て、三阿僧祇劫にわたり六波羅蜜を實踐して無上正等覚を現証正覚する」点が重要である。〈無量寿経〉を始め大乘仏教の範となる菩薩論、成道論の骨格が確認できる。

● 〈無量寿経〉の菩薩論 法蔵菩薩の誓願建立後の菩薩行を有部系文献と照合しすると、以下が共通する（梵本を代表）。「師となる仏の前での発心」(cf. Ashikaga [1965] p.8ff.), 「別願の建立とその実践」(以下 *ibid.*, p.23ff.), 「六波羅蜜行」, 「世生生の菩薩行, 善根の継承」, 「利他行」, 「他者を善趣・良家・瞻部洲に生まれさせ, 諸仏への面前奉持・供養を行う」, 「三十二相の成就」である。次に菩薩行の所説範囲を誓願文まで拡大すると、一層多くの共通点を確認できる（伝康僧鎧訳『無量寿経』を代表。以下『寿経』）。「善趣への生」（第一「無三惡趣の願」, 第二「不更惡趣の願」：第一→大阿○・覚経○・如来会○・梵○・蔵○, 第二→大阿○・覚経○・如来会○・梵○・蔵○）, 「前世の記憶」（第五「宿命智通の願」, 第三十四「聞名得忍の願」：第五→大阿○・覚経○・如来会○・梵○・蔵○, 第三十四→大阿×・覚経×・如来会○・梵○・蔵○）, 「三十二相の成就」（第二十一「三十二相の願」：大阿○・覚経○・如来会○・梵○・蔵○）, 「諸仏供養」（第二十三「諸仏供養の願」等：大阿○・覚経○・如来会○・梵○・蔵○）, 「男性としての生」（第三十五「女人往生の願」：大阿○・覚経×・如来会○・梵○・蔵○）

○),「具根者たること」(第四十一「諸根具足の願」:大阿×.覚経×.如来会○.梵○.藏○),「良家の生まれ」(第四十三「生尊貴家の願」:大阿×.覚経×.如来会○.梵○.藏○),「退転しない者」(第四十七「得不退転の願」:大阿×.覚経×.如来会○.梵○.藏○)である。上記のごとく初期無量寿経誓願文には、男性としての生、具根者たること、良家の生まれ、退転しない者は強調されない(cf.玄奘訳『大毘婆沙論』「捨五劣事得五勝事」)。つまり初期無量寿経と〈婆沙論〉との間にこの菩薩論の共有関係は確認できない。それが明確になるのは伝康僧鎧訳『寿経』以降である。今日、伝支婁迦讖訳『覚経』は竺法護訳説(A.D.308, 天水),『寿経』は仏陀跋陀羅、宝雲共訳(A.D.421, 建業)とされる(cf.香川[1984] p.32)。この年代(A.D.421)は〈婆沙論〉を承け、世親(400-480 ca.)〈俱舍論〉に大きな影響を与えた〈雜阿毘曇心論〉の盛行時である。ちなみに法顕(生没年不明. 399-412 渡印)はこれをマガダ国パータリプトラで得た。彼はこの論を仏陀跋陀羅と共訳し、さらに別伝承では宝雲、僧伽跋摩による異訳も存在したという(双方散逸 cf. 長沢[1993] p.130 注7)。〈雜阿毘曇心論〉と『寿経』との訳者が共通するこの伝承は、両者の接触を示唆する傍証ともなろう。なおその場合、〈無量寿経〉は有部との直接的関係というより、むしろ仏教通念としての有部系教学に基づき整備を承け、その影響下に改訂したと考えられよう。有部系教理は唯識瑜伽行派の成立に多大な影響を与え、後世には、例えば密教家シャーカーミトラ(8c.ca.)やアティシャ(928-1054)がそれを学ぶなど、一部派の立場を越えて明確に基礎学の立場を築いている。

● 〈無量寿経〉における有部説との共通点 (A) 〈阿弥陀経〉においても三宝随念の一つとして出る「念仏(仏随念. Skt. buddhānusmṛti)」には、内容的継承は別としても年代順として、初期仏典…→〈集異門足論〉〈法蘊足論〉…→無著〈三宝随念註〉→世親〈釈軌論〉〈仏随念広註〉という流れがある。この有部から瑜伽行派への流れを〈無量寿経〉が汲むならば、下輩段「衆生たちが、かの如来に十回心を起こすことによって随念し(Skt. sattvās taṃ tathāgataṃ daśa-cittoupādāt samanūsmaṛiṣyanti)」で説かれる「十念」とは、仏十号をその功德の面から随念するといった可能性を含む(cf. 中御門, 藤仲[2008])。ちなみに仏十号随念説には、総別の区別があり、総の立場では「仏・世尊」一号を随念すれば全仏号を随念したことになり、別の立場では各別号を個別に随念することになる。つまり一度の随念でも十度でも同じ功德が得られる(源信『往生要集』cf.『浄全』9, p.1+10(本庄良文 H.21.6. 知恩院浄土宗学研究所定例研発表資料), 世親〈釈軌論〉cf. Jong cheol LEE[2001] p.36, 山口[1973] pp.179-180)

(B) Satoshi HIRAOKA, “The Affiliation of Two Chinese *Samyuktāgamas*” (JIBS.49-1, 2000) は有部系仏典で使用された特徴的な文章（仏名を聞き、歡喜し、毛が逆立つ等）に注目し、『雜阿含經』『別訳雜阿含經』の帰属部派を解明した。これと類似した表現が初期無量寿経の『大阿』（T12, p.317b20ff.）にも見られる。

「仏語阿難阿逸菩薩等。（中略）乃当聞阿弥陀仏声者，甚快善哉，代之喜。仏言。其有善男子善女人，聞阿弥陀仏声，慈心歡喜，一時踊躍，心意淨潔，衣毛為起，涙即出者（阿弥陀仏という言葉聞き、慈しみ、歡喜し、すぐさま躍り上がり、心が清らかになり、体毛が逆立ち、ただちに涙あふれ出る者は）、皆前世宿命作仏道³⁾。」

●小 結 顕教の立場では、多数劫に続く菩提心、実践、諸条件の適合、積善継承が成仏の必須条件である。これについては有部系文献と〈無量寿経〉誓願文とに共通点が確認できた。特にその点が明確な『寿経』は、今日、仏陀跋陀羅、宝雲共訳説（A.D.421）が主流であるから、五世紀初頭に〈無量寿経〉は有部系教理によって成仏の条件を整備したことになる⁴⁾。その時期は〈婆沙論〉を承け、〈俱舍論〉に先行する〈雜阿毘曇心論〉の時期である。また『寿経』は単なる受容に止まらず展開を行った。及び難い釈迦菩薩の菩薩行、成仏の条件を初期無量寿経以上に誓願文に取り入れ、それが容易に成就する仏国土（極楽世界）を改めて宣説したのである。ちなみに極楽世界は三十二相が成就するので一生補処の住処である。これによって、釈迦一仏を理想とし、かつ衆生の機根の面からも成仏者を限定した部派とは一層一線を隔した。ただし成仏の際に釈迦菩薩は釈迦仏となり、阿闍菩薩は阿闍仏となる一方、なぜ法蔵菩薩は別称となるのか。釈迦菩薩や阿闍菩薩は「師仏のようになりたい」と、継承を重視する誓願を建てたので同一名称の仏となった。対して法蔵菩薩は世自在王仏から諸仏国土の勝れた特徴を聞き、取捨選択を行い、より勝れた国土を造ろうと別願を建てて実践に励んだ。それゆえ成仏して別称となった。同時期の浄土教経典ではあるが、〈阿闍経〉は仏の性質の継承を説き、〈無量寿経〉はその展開を強調したといえよう。ちなみに後の大乘の立場からは、仏は一仏でもあり、多仏でもあると説かれる（cf. 安慧造〈大乘莊嚴經論釈〉菩提品）。仏の名も仏の本質の面からは一（共通）であり、救済の面からは多（展開）として現れる。また有部系文献に頻出する「聞阿弥陀仏声…衣毛為起」が『大阿』に出ることから、初期無量寿経の時点ですでに有部系教理との接触が確認できる。以上、部分的考察にすぎないが、〈無量寿経〉には有部系文献による隔時的な影響が確認できる。

- 1) 菩薩論を述べる際には、「菩薩」の起源・原意・受容・展開に関する多論稿を詳査整理する必要がある。この問題について研究史概説を含め、今後の研究展望を示したものに勝本[2009]がある。そこには有部系菩薩論、乃至大乘起源説にまで展開する西・平川論争を始め、現時点での有益な「菩薩」情報が網羅されている。
- 2) その他、玄奘訳『大毘婆沙論』（巻178）弥勒菩薩→弥勒仏、〈法華経〉「序品」日月灯明仏など。
- 3) これについて以下の四点が指摘できよう。①一般的なもので、有部に無所属の〈無量寿経〉編纂者が取り入れた。②有部特有であるが、有部に無所属の〈無量寿経〉編纂者が取り入れた。③有部に所属する（した）者が〈無量寿経〉編纂者であった。④〈無量寿経〉のこの記述が先にあり、それを有部が取り入れた（平岡氏による御教示）。
- 4) 尸陀槃尼撰、僧伽跋澄訳『鞞婆沙論』（A.D.383）と浮陀跋摩、道泰共訳『阿毘曇婆沙論』（A.D.437-439）に完全に対応する菩薩論は見られない。しかし『阿毘曇婆沙論』は元来一百巻であったから、散逸個所に対応個所が存在した可能性もある。また玄奘訳『大毘婆沙論』は後代の訳出（A.D.656）であるが、〈婆沙論〉三本が異本異訳の性質の点から、古伝承をそのまま伝えた可能性もある。〈雑阿毘曇心論〉に先行する〈阿毘曇心論〉（晋僧提婆共慧遠訳『阿毘曇心論』（T28, No.1550））、高齊那連提耶舍訳『阿毘曇心論経』（T28, No.1551）は菩薩論を載せない。

〈主な参考文献（副題略）〉 香川孝雄『無量寿経の諸本対照研究』永田文昌堂、1984、同『浄土教の成立史的研究』山喜房仏書林、1993、勝本華蓮『座標軸としての仏教学』佼成出版社、2009、河村孝照『有部の仏陀論』山喜房仏書林、1975、木村泰賢『阿毘達磨論の研究』（「木村泰賢著作集」4、大法輪閣、1968）、祖父江章子「阿毘達磨大毘婆沙論における菩薩思想の一考察」（『東洋学研究』13、1978）、同「阿毘達磨大毘婆沙論における釈迦菩薩像」（『東洋学研究』27、1992年）、長沢和俊『法顯伝・宋雲行記』東洋文庫、1993、中御門敬教・藤仲孝司「世親作『仏随念広註』和訳研究（前・後）」（『佛教大学総合研究所紀要』15、2008）、西義雄『阿毘達磨仏教の研究』国書刊行会、1975、同「阿毘達磨仏教に於ける仏陀の本願説」（『東洋学研究』10、1976）、藤田宏達『原始浄土思想の研究』岩波書店、1970、平川彰「説一切有部の菩薩論」（「平川彰著作集」2、春秋社、1997）

〈キーワード〉 『無量寿経』、『俱舍論』、『雑阿毘曇心論』、『大毘婆沙論』、釈迦菩薩、阿闍菩薩

（知恩院浄土宗学研究所研究員）